

## 【報告】 ミクロネシア連邦大統領訪問団歓迎レセプションに参加して

飯高 伸五

(高知県立大学文化学部)

2018年1月19日、高知県および高知・ミクロネシア友好交流協会の主催により、高知市内の老舗旅館・ホテルの城西館で、ミクロネシア連邦大統領訪問団歓迎レセプションが行われた。ミクロネシア連邦のピーター・クリスチャン大統領とその一行は、1月18日から20日まで高知県に滞在し、19日の午前には高知城下にある高知県庁で知事との懇談を行い、午後には明治期にチューク諸島に渡った森小弁の郷里にある三里小学校（高知市仁井田）を訪問し、児童と交流した。そして、その日の夜に高知県庁、高知県議会、高知・ミクロネシア友好交流協会の要人のほか、高知市仁井田の関係者、地元企業要人、教育関係者らが参加してレセプションが行われた。私の所属機関の高知県立大学にも案内があり、私も幹部職員1名とともに参加することになった。



▲歓迎レセプションで披露された高知のよさこい踊り

レセプションは、まず尾崎正直知事、次いでクリスチャン大統領の挨拶から始まった。短時間の挨拶ではあったが、先達としての森小弁の事績、ミクロネシアの日系人の活躍、日本とミクロネシア連邦の国交樹立30周年などの話題が言及された。全員が着席し、誰もしゃべらずに挨拶に聞き入るレセプションのスタイルに対して、クリスチャン大統領は「本日は祝いの席だが皆が緊張しているように見える」と冗談をいう一幕もあり、会場の雰囲気が和んだ。乾杯の発声をした浜田英宏高知県議会議長は、

挨拶の中で2013年10月にチャーター便を手配して組織された高知県ミクロネシア連邦友好現地訪問に言及し、現地でプレゼントされた貝製のネクタイが4年以上経った現在でも光り輝いていると地元手工芸品に賛辞を述べ、今後のミクロネシア連邦と高知の友好関係の発展を祈念した。宴のたけなわでは高知県のよさこい踊りが披露され（写真）、大統領夫妻や在日本ミクロネシア連邦大使館職員らも壇上に上がり、即興で踊り出した。閉会の挨拶は、ミクロネシア連邦名誉総領事を務める高知・ミクロネシア友好交流協会会長が行い、約2時間のレセプションは閉会し、翌日には大統領夫妻一行は高知を後にした。

近代におけるミクロネシア地域と高知県との関係は、1891年に森小弁が一屋商会の社員としてチューク諸島に向かった時にさかのぼる。その後、森小弁がコプラの仲買人として成功し、ウェノ島の伝統的首長の娘イザベルと結婚して現地で一大ファミリーを築いたことは、日本でもよく知られている。森小弁は、ミクロネシア地域が日本統治下に入ると名声を得て、1919年には高知県知事から木杯を授与され、晩年の1940年にはトノワス島（夏島）に顕彰碑が設立されている。終戦まもない1945年8月20日、ポレ島（金曜島）の長男宅で森小弁は息を引き取り、戦後はしばらく忘れられた人物だったが、やがて冒険ダン吉のモデルだったという言説が登場し、「海外雄飛」の先駆けとして再発見されていった（飯高 2012）。一方、高知県では、こうした戦後言説が広く流布する以前からしばしば地元紙で取り上げられ、戦後においても継続した関心があった。1980年代には森小弁とミクロネシア地域に関する連載記事が生まれ、1990年代には連載をまとめた書籍が出版されている（高知新聞社 1998）。

2010年代になって、高知県ではミクロネシア地域との関係が再び注目されるようになった。ここで大きな役割を果たしたのが、高知・ミクロネシア友好交流協会の設立であった。2013年6月、名誉会長を高知県知事、会長を高知市仁井田出身の県議会議員として同協会は発足したが、発起人は森小弁の遠縁にあたる山本敦夫氏で、それまで親族訪問など民間レベルの交流を続けていた。同協会設立当時は、森小弁の曾孫にあたるマニー・モリのミクロネシア連邦大統領在任中（在任期間：2007年5月～2015年5月）であった。同大統領は2008年11月に日本との国交樹立20周年記念で来日した際、初めて高知県を訪問し、森小弁の故地など、いくつかのゆかりの土地も訪問した。その後も、在任期間中に何度か来高し、モリ大統領（当時）の動向は地元紙でも大きく取り上げられた。

2016年10月には、ミクロネシア連邦独立30周年記念祝賀レセプションが高知県および高知・ミクロネシア友好交流協会の主催で行われ、東京から在日本ミクロネシア連邦特命全権大使らが来高している。また、2017年4月には高知・ミクロネシア友好交流協会の会長が、ミクロネシア連邦名誉総領事に就任するなど、ミクロネシア連邦

と高知県との交流はさらに深まりをみせている。2018年は、日本とミクロネシア連邦の国交樹立30周年にあたる年である。今回実施されたレセプションでは、この記念の年に友好関係をますます深めていこうという主旨の発言も随所に聞かれた。高知県において民間レベルの交流から始まった、ミクロネシア連邦と日本の交流事業がどのような展開を見せていくのか、国政レベルの動向とあわせて注目していきたい。

【参考文献】

飯高伸五

2012「高知から南洋群島への移住者・森小弁をめぐる植民地主義的言説の批判的検討」『高知県立大学紀要文化学部編』61: 21-37。

高知新聞社（編）

1998『夢は赤道に——南洋に雄飛した土佐の男の物語』高知新聞社。